



- 学長メッセージ
- 義肢装具自立支援学科紹介
- 運動機能研究センターの取り組み
- 新潟医療福祉学会 学術集会の報告
- 研究最前線
- 特色ある大学教育の現場から
- 強化指定部の2年間の軌跡・戦績
〔バスケットボール部・水泳部・サッカー部〕

- 学生生活〔部活動・ボランティア紹介〕
- 学生Kidsの取り組み
- 障害者スポーツ大会に参加して
- CAMPUS NEWS
- 学友会
- 同窓会
- 受験生のみなさんへ

7期目を迎えるにあたり、 本学の新しい取り組みや本学が果たす役割について、 高橋学長より語っていただきました。



新潟医療福祉大学
学長 高橋 栄明

地域社会における優れたQOLサポーターの育成を目指して

Q1 新潟医療福祉大学は2001年4月に開学し、2007年度、7期目の新生を迎えます。今年度入学生より2学部から3学部への改組（「健康科学部」設置）、医療技術学部「義肢装具自立支援学科」の設置、医療福祉学専攻（博士後期課程）「健康科学専攻（修士課程）」の設置など、開学以来新しい取り組みを続けるのはなぜでしょうか？

地域社会のニーズに応えた結果として、学部の改組、学科の新設、博士後期課程の新設、健康科学専攻の増設を行っています。

新潟医療福祉大学は超高齢化社会が到来を控えた2001年4月に、保健・医療・福祉を充実させていきたいという地域社会の期待を背負い開学しました。それ以来『優れた「QOLサポーター」の育成』を本学の理念として、高度な専門性と豊かな人間性を備え、多職種で連携してクライアントを支えることができる人材育成を教育目標に取り組みできました。高齢化が進む中で、予防や健康維持、健康増進に対する期待が高まっています。また、複雑化、多様化する人々のニーズに応えるためには、複数の専門職が連携、融合してクライアントのケアにあたるのが重要です。地域社会で求められる、QOLサポーターと呼べる保健・医療・福祉分野の専門職種は多種多様ですが、福祉機器のスペシャリストも社会

では求められています。その要望に応えるために2007年度に義肢装具自立支援学科が新設されます。そして、ますます高度化する専門分野の研究の推進や教育者の育成を進めています。

地域社会で必要とされる人材育成に本学が取り組むことは、地域社会の保健・医療・福祉分野の充実に繋がっていきます。

Q2 地域社会が抱える課題と本学が果たす役割について考えを聞かせてください。

新潟県は深刻な医師不足が慢性的に続いています。新潟県は県域が広いために、都市部と周辺地域では医師の充足率の差が大きく、山間部や農村地域では特に深刻な問題となっています。医師不足を解消し医療を充実させることは、もちろん地域で生活する方の健康長寿に繋がります。私も新潟県の医師不足を解決するために活動している会のメンバーの一人ですが、同時に、それ以外の方法でも健康で長生きができる社会を創造することに貢献することができます。

それは本学の取り組みそのものです。健康長寿を目指すには地域における三つの力「地域教育力」「地域医療力」「地域福祉力」が重要であると私は考えています（図参照）。また、それぞれの分野が連携する事により、より大きな力を生み出すことができます。本学では既に3期生まで卒業生を社会に送り

だしましたが、卒業生は就職先である病院や福祉施設において、人材として「地域医療力」「地域福祉力」の充実に貢献しています。また、大学院やプロジェクト研究センターをはじめ教員が個々で取り組む地域活動などは、地域で生活する人々やそれを支える専門職の生涯学習や啓発活動に貢献し、人材育成と共に「地域医療力」「地域福祉力」を高める「地域教育力」といえるでしょう。

このように本学が保健・医療・福祉分野で教育、研究、地域活動を実践していくことは、地域社会の「健康長寿」を実現するために、大きな貢献をもたらすことと考え、今後もより一層それらに取り組んでまいりたいと考えています。



健康長寿を目指す地域における三つの力(3SP)の向上と連携
(3ソフトパワー: Three Soft Powers:高橋栄明, 2007)

平成19年度より新設される学部・学科

学部	
医療技術学部	理学療法学科
	作業療法学科
	言語聴覚学科
	義肢装具自立支援学科
健康科学部	健康栄養学科
	健康スポーツ学科
	看護学科
社会福祉学部	社会福祉学科

*健康科学部は医療技術学部の各学科より再編成され、平成19年度入学生より健康科学部の各学科に入学します。
(平成18年度入学生までの在籍学部に変更はありません。)

大学院 医療福祉学専攻

修士課程	保健学専攻	理学療法学分野
		作業療法学分野
	健康科学専攻	言語聴覚学分野
		健康栄養学分野
		健康スポーツ学分野
社会福祉学専攻	看護学分野	
	保健医療福祉政策・計画・運営学分野	
	保健医療福祉マネジメント学分野	
博士後期課程	医療福祉学専攻	心身機能学領域
		健康福祉学領域
		生活環境学領域

東京キャンパス開設

本学では、「東京キャンパス」を2007年4月、東京都千代田区丸の内建設中のサピアタワー（東京駅直結）10階に開設します。

東京キャンパスには、40人収容の教室や、応接室（演習室）、ラウンジなどを設け、サテライトキャンパスとして授業を行ったり、TV会議システムを利用して新潟ー東京間での同時双方向受講が可能となります。また社会人を対象にした公開講座等を開講する他、就職支援や、首都圏在住OBの交流などにも利用することを計画しています。

「新潟発全国へ」、東京キャンパスを活用し、各種情報を発信する拠点にしたいと考えています。

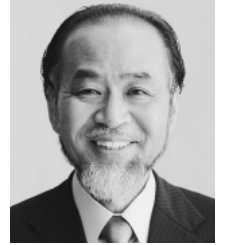
医学面と工学面をマスターする、 新しい分野でのプロフェッショナルを育成

義肢装具自立支援学科開設にあたって



義肢装具自立支援学科が入る第5研究棟(L棟)

1987年に義肢装具士法が施行されて以来、20年の節目である2007年4月、いよいよ義肢装具自立支援学科がスタートします。義肢装具士養成校としての大学では2番目、医療福祉系大学では初めての開設であり、また日本初の単独学科でもあります。医療界はもちろん、日本全国から熱い注目を集めています。特に学科名である「義肢装具自立支援」に込められた意義に大きな期待が寄せられています。生体の特性や人間の心理などの医学面と、適合技術・製作技能などの工学面をマスターした新しいプロフェッショナルを養成していきます。



義肢装具自立支援学科
学科長/教授 江原義弘

●今求められる自立支援技術

われわれが目指す「自立支援」とは、部分的な機能向上だけではなく、すべての生活シーンにおいて、義肢装具や福祉機器を活用して、高齢者や身体に障害をもった方が自分自身で生活できるように支援することです。現在ではモーターで動く電動車いすや電動義手、マイクロコンピュータが内蔵された義足などが実用化されています。住宅内では電動リフターや電動ベッド、ベッドから車いすへの乗り移りの介助装置など、さまざまな新しい福祉機器が開発されています。これらを十分に活用して自立を支援することが重要であると考えています。高齢化が進み、義肢・装具・車いす・移動福祉機器・杖・コミュニケーション機器などの自立支援福祉機器に対するニーズが高まっており、これらを使用する個人にしっかりと適合させる技術をもつ専門職がますます望まれています。

現在、医療職と呼ばれる国家資格をもった専門家の一つである義肢装具士は、義足や義手、装具の製作や身体への適合を主たる業務とし、約3000名が臨床現場で活躍しています。この知識と技術をベースに、広く福祉機器の分野でもリーダー的役割を果たすことが、われわれの考えるこれからの義肢装具士像なのです。本学科では義肢装具や福祉機器を必要とする方々の自立生活を助け、QOL (Quality of Life: 生活の質) を高める上で必要な専門知識と技術をもった人材を育成していきます。

●充実したカリキュラムと ライセンスパワー

幅広い知識と技術を身につけるためには、多くのことを学び自分のものにしていかな

くてはなりません。そのためカリキュラムは他の養成校にないオリジナリティあふれる科目が数多く設定されています。日本初という科目も一つや二つではありません。

「臨床歩行分析演習」では、ヒトの歩行を学習した後に、三次元動作解析装置などを使用して、関節や筋肉の動きといった生体の運動を物理学の観点から分析し、患者さんの治療や義肢装具の理解を深めることを学びます。「福祉用具Ⅰ」では、生活場面で使用される車いすはもちろんのこと、スポーツ用車いすや特殊機能を持った車いすの技術や適合・評価法を学び、また日進月歩の勢いで開発されている移動機器について幅広く理解を深めます。また「臨床実習」は関連施設・義肢装具・福祉用具の3分野について実施し、海外研修はアメリカとド

イツで行います。これらを教授する教員はそれぞれの分野のスペシャリストが集結し、「日本最強の教員軍団」を自称しています!!

カリキュラムは単に義肢装具士国家試験の受験資格を取得するための科目構成ではなく、福祉用具専門相談員や福祉用具プランナー、福祉住環境コーディネーターといった社会的評価の高い民間資格の取得も視野に入れた構成となっています。これらのライセンスパワーを身につけた卒業生を社会に送り出すことが、われわれ教員の喜びであり、かつ義務でもあります。

4月に入学する第一期生と、われわれ教員も「学科教員一期生」として心一つにし、この新潟にあたらしい歴史の一步を記すと張り切っています。

世界水準の機能性、安全性を誇る 充実した設備環境！

新設された第5研究棟1Fの各実習室では、主にモデル被験者さんを対象に、障害の評価と義肢装具・福祉機器の適合実習を行います。適合実習室を2箇所設けて二学年同時の実習が行えるだけでなく、学生一人当たりの占有スペースはそれぞれ4㎡以上を確保しています。

製作実習を行う2Fでは、石膏モデル修正、プラスチック成形、切削作業、組立て、縫製など、作業別にそれぞれ単独の実習室を設けることにより、安全で整然とした実習授業が行えます。さらに、作業中に出る粉塵の集塵システムや、有機溶剤を扱う際に集中的な排気を行うシステムを備えており、作業者の健康にも十分な配慮がなされています。その他、工作機械の数、学生一人当たりの占有スペースの広さはいずれも世界水準を満たすレベルです。



最新鋭のドイツ製
回転切削加工機械



分厚い皮革も縫製できる
業務用ミシン

運動機能研究センターの取り組み

ヒトの「運動」は脳や筋肉・各種感覚器（体性感覚、視覚、平衡感覚など）が相互に作用しながら遂行されています。これらの相互作用について脳活動の部位や程度、筋活動のバランス、手や脚などの四肢空間位置の変化などから多角的かつ総合的に研究するために「運動機能研究センター」は設立されました。

●センターの目的

運動機能研究センターは、エンジニア、理学療法士、作業療法士、運動生理・生化学研究者、義肢装具士、医師から構成されています。センターの目的は、(1)ヒトの動きを運動学的に詳細に分析し、データベースを構築するとともに、動作障害を有する患者さんの評価・治療に応用すること、(2)運動時の脳活動を非侵襲的に計測・解析し、運動制御機構・運動学習メカニズムを研究し、運動療法に応用すること、(3)運動が生体に及ぼす影響を明らかにすることの3点です。

●センターの活動内容

ヒトの動きを解析する手法として、“動き”そのものを詳細に解析する手法と、動きを引き出している生体反応（筋肉の活動）を解析する手法があります。三次元動作解析装置という機器を活用すると、身体運動中の各関節運動を詳細に計測することができます。また、床反力計や筋電計を併用すると身体の動きを起こすための力の大きさを解析することができます。例えば、歩くという動作に着目した場合、踵を着いた瞬間に膝関節が少しだけ曲がって衝撃を吸収していることや、その際に膝を伸ばす筋肉が一時的に強く活動して、すぐに活動が弱くなることなどを計測することができます。当研究センターでは、8台の赤外線カメラを含む最新の三次元動作解析装置と6枚の床反力計、16チャンネルの筋活動計測装置を駆使して様々な動作を解析しています。

近年、非侵襲的脳機能イメージング装置という高性能の機器が著しく発展し、それに伴いヒトを対象とした運動時の脳活動の研究も活発になりつつあります。例えば、脳磁界計測装置を利用することにより、微細な運動遂行時における大脳皮質運動野や感覚野の活動状態を数ミリ秒単位で計測することができ、脳酸素モニタを利用することにより粗大運動（例えば自転車駆動など）を行った際の脳の活動状態や運動を学習していく課程を解析することができます（図1）。また、経頭蓋磁気刺激法という強力な磁気刺激を頭に与える方法を利用して、手足の筋肉を活動させ、脳が活動しやすい状態になっているか否かを解析することもできます（図2）。安静状態で脳

これらの研究を遂行することにより、運動機能障害および生活習慣病の予防・改善のための新たな運動療法や運動処方の開発を目指します。また、生体運動に関する様々な研究成果を必要とする企業との共同研究を積極的に行っていくことも当センターの設置目的の一つであります。



理学療法学科
学科長/教授 大西秀明

を磁気刺激した場合、手や足の筋肉から電気信号を導出することができるのですが、運動を行おうとイメージしている状態で刺激を行うと、より大きな電気信号を得ることができます。当研究センターでは、脳酸素モニタおよび経頭蓋磁気刺激装置（当大学所有）、脳磁界計測装置（独立行政法人国立病院機構西新潟中央病院所有）を利用して各種動作時や運動イメージ時における脳活動を解析し、運動制御機構・運動学習メカニズムを解明しようと研究しています。

さらに、基礎的研究として運動や生活習慣が骨格筋の糖代謝機能に及ぼす影響とそのメカニズムについての研究や、運動がラット視床下部の代謝調節機能に及ぼす影響とそのメカニズムについての研究も行っています。

当センターに所属する教員が指導している大学院生のうち今年度修士課程を修了する院生のテーマは、「片脚立位における姿勢コントロール」「滑りやすい床面における滑らないための歩行様式」「肩関節拳上角度と肩甲下筋の筋活動との関係」「自転車エルゴメーター駆動時における大脳感覚運動野の活動について—近赤外線分光法による検討—（図1）」「小指浅指屈筋の機能解析—小指運動機能と小指浅指屈筋の腓断面面積および筋活動との関係—」などです。企業との共同研究以外に、今年度は臨床歩行分析研究会定例会を協賛したのみでしたが（図3）、次年度は有職者を対象にして学術的な講演会や各種計測・解析手法について研修会等を積極的に開催していきたいと思っております。

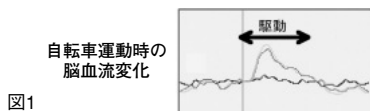


図2



図3



第6回 新潟医療福祉学会 学術集会の報告

昨年10月、健康スポーツ学科が事務局を務め、「第6回新潟医療福祉学会学術集会」が本学にて行われました。今回の学会テーマは「地域の健康を支える大学の役割」でした。

また、このテーマに基づき、市民に広く開かれた学会を目指す新しい試みとして、学会会員だけではなく、一般の方々の参加を可能としました。基調講演では、NHKのラジオ番組にも出演されている桜美林大学 教授 柴田博先生をお迎えして、地域の皆様からも多数ご参加いただきました。

昨年10月21日土曜日、第6回新潟医療福祉学会学術集会がさわやかな秋晴れの天候の下、本学大講堂で開催されました。今回の学会のテーマは「地域の健康を支える大学の役割」であり、このテーマを受けて午前一般口頭発表と一般ポスター発表、午後から基調講演とシンポジウムが行なわれました。特に午後の基調講演とシンポジウムでは、これまでの学会と違った新しい試みとして、市民に広く開かれた学会をめざし、学会会員だけではなく、一般の方々の参加を可能としました。

午前一般口頭発表は、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、健康栄養学科、健康スポーツ学科、看護学科から各1題の合計6題の発表がありました。若手の発表者が多いことから、活力に満ちた斬新な発表内容が多く、また、質疑も活発に行なわれました。一般ポスター発表は合計22題の発表があり、第2体育館を利用して行ないましたが、予想以上に多くの人々からご来場いただくことができ、体育館を埋め尽くしていました。また、30分間の発表時間では足りなく、時間終了後も活発な意見交換が行なわれていました。

午後からは、基調講演とシンポジウムが行なわれましたが、基調講演では桜美林大学大学院の柴田博先生をお招きし、「長寿社会の食育・体育・知育」というテーマで講演をしていただきました。この基調講演は、前述の通り、一般市民の皆様への参加を募ったことや、柴田博先生が、NHKラジオ番組あさいちばん「健康ライフ」の出演者であることもあり、大学周辺の一般市民の方々も多数参加されました。特に、この基調講演の中では、



高齢社会における老人の自立した生活に、食育と体育、知育が欠かせないことや地域の様々な活動の中での世代間交流の有効性について、わかりやすく、また、楽しくお話して

いただきました。続いて、柴田先生の基調講演を受けてのシンポジウムが開催されました。このシンポジウムは、「地域の健康を支える大学の役割」というテーマで、本学の健康栄養学科齊藤ト子先生、理学療法学科小林量作先生、総合型地域スポーツクラブのNPO法人ウェルネス村上の高田晃様、NPO法人スポネット聖籠の小林純一様、NPO法人ハピスカとよさかの岡本義生様の5名をパネリストとして開催しました。齊藤ト子先生からは、本学と地域の栄養指導の実践事例と今後の課題をご発表していただき、小林量作先生からは、小林先生が実践されている転倒予防教室の実践と大学・地域の連携の課題、そして総合型地域スポーツクラブの3名のパネリストからは、本学と地域とのこれまでの連携の報告と今後大学に求めたい地域からの提言を発表していただきました。最後に、本学と地域がどういった多面的かつ統括的な連携が可能かのモデルを作成するとともに、



今後の具体的な連携のあり方を提言してシンポジウムを終えました。

今回の学会は、健康スポーツ学科が事務局となり開催しましたが、地域住民に開かれた学会を目指し、広報宣伝活動、講演やシンポジウムの内容検討を行なってきました。また、講演やシンポジウムに冠スポンサーをつけるといった新しい試みにも挑戦してみました。初めての試みで充分成果が上がったかどうかわかりませんが、来年度の事務局となる看護学科の皆様うまくパトタッチしていきたいと考えています。学会会員、参加各位のご協力、本当にありがとうございました。

【プログラム】

- 9:30~11:30 医療・福祉・健康科学に関する研究報告
- 12:30~13:00 新潟医療福祉学会総会
- 13:10~14:15 基調講演（後援：新潟日报社）
「長寿社会の食育・体育・知育」柴田博先生
- 14:30~16:15 シンポジウム（特別協賛：ミズノ株式会社）
「地域の健康を支える大学の役割」
 - ・健康栄養の立場から
 - ・健康スポーツの立場から
 - ・理学療法・転倒予防の立場から



よりおいしくて食べやすい調理法を探求し、科学する

「健康栄養学科 調理科学グループ」

健康栄養学科 准教授 伊藤直子

私たちの研究グループでは、低温スチーム装置という調理器具を用いて、様々な食材を調理し、その効果を調べています。調理における加熱方法の中で、「蒸し」は安定した温度で均一な加熱ができます。普通の調理では、100℃あるいはそれ以上の温度で加熱しますが、低温スチーム装置は温度を50～90℃で一定に保って蒸す調理器具です。この温度帯で調理すると、たとえば、通常では硬くて食べられないような硬い部分の牛肉が非常に柔らかく、しかもおいしくなります。「おいしい」「柔らかい」という感覚は主観的なものであり、個人差がありますが、硬さを物理的に測定したり組織を顕微鏡で観察したり、食材に含まれている成分を調べることで、どのようにおいしく柔らかくなるのかを客観的に示すことができます。牛肉では硬さを調べる

ことにより、噛み切りやすくなっていることが示されました。また、組織観察から、筋繊維がほぐれ、脂肪粒が全体に散らばっていることがわかりました。さらに、旨味の元であるグルタミン酸の増加も見られました。このように、調理したものを様々な角度から調べ、なぜおいしくなるのか、また、それに基づいて、どのようにしたらより食べやすくなるのかについて、研究を行っています。これまでの結果から、この装置で調理した食材を利用することで、高齢者や嚥下困難者への食事の質を高めることができるのではないかと考えています。卒業研究では、これを応用した、高齢者や嚥下困難者にも食べやすい肉料理や、栄養価を高めたプディング、冷めてもおいしく食べられるから揚げなどを試作し、食べやすさの研究なども行っています。食べるという



ゼミ生とともに低温スチーム装置を用いて食材の調理効果を調べる伊藤先生（中央）

ことは、生きる基本であり、年をとってもおいしいものがおいしく食べられることはQOLの向上につながります。研究がこのようなことにも貢献できることを期待しています。



調理効果を調べるため食材の水分含量を測定する

包括的セクシュアリティ教育のプログラム開発をめざして

「看護学科 包括的セクシュアリティ教育(Comprehensive Sexuality Education)研究会」

看護学科 准教授 中山和美

これまで日本における性教育は「知識中心型」か、あるいは人工妊娠中絶の危険を強調する等の「脅し型」でした。また初潮や性器についての知識を断片的に提供する傾向もありました。しかし、私たちは欧米で進められているような包括的セクシュアリティ教育(Comprehensive Sexuality Education)をめざし、頭文字を略してCSE研究会を発足させました。研究会のメンバーは、昨年4月に開設された看護学科の母性看護学、成人看護学、地域看護学領域の5人の教員です。

包括的セクシュアリティ教育のコンセプトは、発達や人間関係、人生に対処する技能、性行動、性に関する健康、社会と文化の6点です。性をSex(セックス)ではなくSexuality(セクシュアリティ)としてより広く捉えたいと幼少期から教育しますが、本学では大学生向けCSEの開発をめざ

しています。この世代こそセクシュアリティ教育が必要であるにもかかわらず、教育実践が遅れているからです。本研究会は今年度のテーマを「私を大事に、あなたを大事に」として、昨年7月から活動を開始しました。このテーマに基づき、①コミュニケーションスキル・トレーニング、②人権と相互尊重を学ぶ講演会、③豊栄警察署の協力による、性暴力被害から自分自身を守る護身術セミナーを大学内の各委員会と協力して開催しました。今後は禁煙教育セミナーを予定しています。また、対象者が大学生であることから、企画段階からの学生参画を取り入れ、主体性を重視した健康教育の方法を開発しようと考えています。また、昨年10月にはこのような私たちの取り組みについてICM(国際助産師連盟)アジア太平洋地域会議において実践報告をしました。そして、この報告を通じて他国の助産

師諸氏からも包括的セクシュアリティ教育について助言をいただいていたところです。

私たちは本研究会活動を通じて、学生が自分自身のセクシュアリティと健康に関心をもつことを望んでいます。それにより保健医療や福祉の援助者になったときに、対象者のQOL(Quality of Life)を考えられる専門職者として、地域に貢献できる人材となることを期待しています。



豊栄警察署署員の協力による護身術セミナーの様子

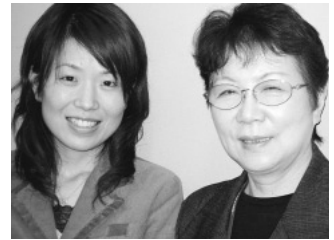
修士論文発表を行って

保健学専攻 作業療法学分野1期生(2007年3月修了)【岩崎ゼミ】熊谷 敏枝

私は、臨床経験4年目(精神科で働き始めて2年目)の時、大学院に入学しました。最初は、研究テーマも曖昧で、手探り状態でした。精神科作業療法では治療効果を証明することが難しく、それがもどかしいと感じながら働いていました。私にとっては初めての研究でしたが、大学院で研究の流れや方法などを学び、今回「精神科長期入院者のADLにおけるバランス機能改善のための訓練方法の検討」というテーマで取り組みました。精神科では、長期入院や高齢化、さらに精神障害者に特有の姿勢と運動パターンが見られます。その運動パターン改善のために、身体的介入を2ヶ月間行いましたが、結果はネガティブなものでした。それでも、今回の研究が今後さらに良い援助をするための材料となります。どんな結果でもそこから、新たに学ぶことがあり、それがステップアップにつながると思います。

発表を終えて、1番は安心したのと、やり遂げたという思いでした。同じゼミの仲間にも知恵を借り、それに協力して下さった患者様、勤務先の病院スタッフの援助があってこそ、この研

究の発表が出来たと思います。私1人では研究を進めることが出来ませんでした。大学院の2年間を振り返って大変なこともありましたが、漠然と苦手だと感じていた研究が、臨床現場でのほんの小さな疑問でも「患者様のために何とかしたい」というあつい思いが研究につながると先生から学びました。研究を通して、先生方や院生の仲間との出会い、そこから学ぶものが多く、沢山の人の支えてもらったということが、今一番感じていることです。私が、この2年間で学んだこと、感じたことを忘れずに、これからも患者様のために援助出来ればと思います。作業療法士としての自分のあり方、考え方、また目標など研究を通し改めて実感、発見できたことは、本当に良かったと思います。



担当教員岩崎先生(右)と熊谷さん(左)

学会で研究発表を行って

言語聴覚学科3期生(2007年3月卒業) 水上 匡人

昨年9月に名古屋で行われた日本神経心理学会で、卒業研究として取り組んだ特殊な書字障害の患者さんの研究発表を行う機会を持つことができました。この研究を行ったきっかけ、発表までの流れと、この経験から学んだことについて皆さんにご紹介したいと思います。

言語聴覚学科では3年後期に卒業研究ゼミが開講し、指導教員の下でテーマを考え、研究を進めていきます。私がこの卒業研究に取り組んだきっかけは、3年後期初めての学外臨床実習で担当させていただいた患者さんでした。その方は言葉話すことにも、聞いて理解することにも、文字を読むことにも何の支障もないのに、文字を書くことだけができませんでした。この症状は純粋失書といい、教科書では学んでいたのですが、実際に患者さんを見ると、とても不思議でもっと調べてみたいと興味を持ちました。実習病院の言語聴覚士の先生やゼミの先生に相談したところ「この患者さんは非典型的で興味深い点があるから、やる気があるなら実習が終わってからもっと詳しく調べさせてもらうといい」とアドバイスを受けました。

そして患者さんご本人と、実習病院の言語聴覚士の先生と院長先生にご許可をいただき、3年生の春休みの期間を使って、患者さんが病院に外来受診される日に少しずつ検査を行いました。検査の内容は先生方とも相談して進め、途中経過を地域の病院の先生方が参加される症例検討会で検討していただいたりもしました。予想と違う検査結果が出て悩んだり、患者さんに負担にならないように気分よく検査を行っていただくことが難しかったりもしましたが、自分で研究を進めていくやりがいも感じるようになりました。そしてゼミの先生に勧めていただいたこともあり、9月の日本神経心理学会での発表を申し込んだところ、運よく採択されました。

4年前期に入るといった卒業研究から離れて、次の病院での臨床実習と国家試験の勉強に取り組みましたが、研究の経験はいろいろな意味で実習などにも活かすことができたと思います。本格的に研究のまとめに入ったのは8月に入ってからです。これまでに報告された論文をいくつも読み、自分の得た検査結果と徹底的に比較検討しました。そして先生方の意見を聞いたり自分で考えたりしていくうちに、少しずつではありますが、ようやくこの患者さんの症状と検査結果全体の意味するものが理解できるようになってきました。発表の準備ができたのは学会の約1週間前でした。

学会では、学科の卒業生の先輩方が何人も研究発表をされていたので心強く感じましたが、学会場で演題に立ち、数百人の学会参加者の前で発表するのはさすがに緊張しました。予想外の質問をされて答えがしどろもどろになりかけたりもしましたが、自分の研究について第三者の先生方の意見を聞くことができ、とても勉強になりました。

学会で発表するまでの約1年間を振り返って感じることは、自分で考えるということの重要性です。先生方に教えてもらって「ああ、そうなんだ」ではなく、「なぜそうなるんだろう」と考え続けることによって、最後には自分で納得し、理解を深めることができました。この「なぜ」を忘れずに今後も臨床や研究に取り組んでいきたいと思っています。



第30回日本神経心理学会、2006年9月22・23日、名古屋市

強化指定部の2年間の軌跡・戦績

2005年4月に本学では「健康スポーツ学科」の開設と同時に、国内外で活躍し、人々に夢や感動を与えられるようなトップアスリートを育成することを目的として、バスケットボール、水泳、サッカーの強化指定部を発足しました。発足後、2年が経ち、アスリート達の活躍が本学を、そして新潟を活気づけています。また、今年度より運動生理学の第一人者である山地先生をお迎えして「陸上競技部（駅伝チーム）」についても強化していく予定です。

バスケットボール部

男女バスケットボール部は、2005年に強化部として発足し、当初から県内外のバスケットボールファン、関係者を驚かせる活躍をして参りました。そして、1年目からの地道な活動が実り、2006年には女子バスケットボール部が「第40回北信越学生バスケットボール選手権大会兼インカレ予選」において準優勝という成績を収め、強化2年目にして見事インカレ出場という快挙を成し遂げました。

新潟県大会でも1年目から上位入賞を果たすことができました。また、国体選抜メンバーにも男子では田中利明（健康スポーツ学科3年）、加藤嵩之（健康スポーツ学科2年）、堺紀人（健康スポーツ学科2年）、女子では渡辺恵（社会福祉学科4年）、小田文子（作業療法学科2年）、広野奈緒（健康スポーツ学科3年）らがメンバー入りを果たすことができました。

このような結果を残すことができたのも、保護者の方々や関係者から多くの励ましをいただいたからだに感謝しております。また、保健・医療・福祉の総合大学としてこのような活動を支えるスタッフの活躍も見逃せません。プレーの基礎となる体作りでは本学准教授でアスレティック・トレーナーでもある柵木先生が医科学的な知

見に基づいたトレーニングを施しており、ここ一番という場面では威力を発揮しました。また、スポーツ障害については本学教授の石川先生が監督・コーチと日常的に連携し、選手のケアを行ってきました。今後も、男女ともに毎年強力な戦力となる優秀な新入生が入学しているため、練習内容もさらにレベルアップし、県内大会での優勝そして男女アベックでインカレ出場を目指して取り組みます。



水泳部

活動は通常週に7回練習をし、長期休業中は週に10回練習をしています。集中講義等がある際には、早朝練習を行い、集中講義を受講後また練習をするといったハードなトレーニングを行い、文武両道を目指しています。

強化部として設立された当初は6名という少人数でチームを立ち上げたため多くの難関もありましたが、インカレ（全日本学生選手権）において1年目には松山祥子（健康スポーツ学科3年）、2年目には澤田涼（健康スポーツ学科3年）が入賞という快挙を成し遂げました。また国民体育大会で駒形進（健康スポーツ学科2年）と澤田の両選手が入賞する好成績を収めることができました。さらに新たな年を迎えた2007年シーズンには、標準記録が日本ランキング32位相当という大変厳しい記録に設定されている「競泳JAPAN OPEN」へ郡山奈々（健康スポーツ学科2年）、澤田、駒形が出場

し、女子800m自由型で郡山が5位、澤田が6位という成績を収めました。

強化活動以外にも新潟県全県の小・中・高校生及び大学生・一般の選手を対象とした記録会も本学プールで開催しており、地域と密着した強化体制を確立していくことを念頭に置き、今後も「日本一」を意識して毎日厳しいトレーニングに励んでいきます。



サッカー部

Jリーグ発足に伴い、国内のサッカー事情は大きく変化しました。現在では昔はあまり人気のなかったサッカーも、今では多くの子供達に関心を持ちプレーしています。私たちの周りも、アルビレックス新潟の誕生により大きな変化が起こりました。県内では多くの子供たちが「アルビレックス新潟でプレーしたい」「アルビレックス新潟を応援したい」と気持ちを込めてプレーしたり、応援する姿をよく見かけます。



私たち新潟医療福祉大学サッカー部は、そのような土壌のもと2005年に誕生しました。大学スポーツと地域スポーツとの連携により、選手育成および指導者育成を図るという目標を

掲げ、チャレンジしています。

2007年4月開幕の国内女子最高峰L1リーグには、女子部員の波佐谷灯子（健康スポーツ学科1年）がアルビレックス新潟レディースの一員として参戦します。

「チャレンジすることなしに進歩はない」を合言葉に、部員全員がこのことを実践し、社会人として地域スポーツに貢献できる人物を輩出するため、日々取り組んでいます。

【戦績】

- 2005年北信越大学サッカーリーグ2部 優勝 1部昇格
- 2006年北信越大学サッカーリーグ1部 3位
- 2006年新潟県大学・高専リーグ1部 優勝

【主な選手】

- 小柳 定廣 U-16日本代表（健康スポーツ学科2年）
- 波佐谷灯子 U-17日本女子代表 アジア大会優勝（健康スポーツ学科1年）

バドミントン部

私たちバドミントン部は自由な部活です。ですから活動内容は、バドミントンを通してそれぞれ自由に活動しています。大会に出てもよし、仲間を増やしてもよし、ヒマを潰すのもよし、時には活動しなくてもよし、といった感じで、それぞれ自分の希望に合わせてバドミントン部を利用しています。

アピールポイントは、遠征（大会）がある、大学祭に出店する、人数が多い、飲み会がある、などです。そしてこれからも、より活動の幅を広げていきたいと思っています。



陸上競技部

陸上競技部はインカレ出場を目指し日々練習に励んでいます。部の特徴として挙げられるのは、競技力を強くすることだけを目的とするのではなく、個々に対し仕事の役割が与えられていることです。データーバンク係やトレーナー係などの仕事を行い、部として循環するよう努めています。部の雰囲気は大変良く、お互いに刺激し合って練習の質を上げていきます。練習場所はおもに大学グラウンドで全ての講義が終わる午後18時から21時ぐらいまで行っています。現在、部員のほとんどが健康スポーツ学科所属ですが他学科からの入部もお待ちしております。



手話部

私たち手話部は主として、手話通訳士、ろう者の方々に講師にむかえて手話の勉強をしています。特別活動として、学祭での手話歌発表や保育園での手話指導、聴覚障害の子供たちとの勉強会や交流会といったボランティア活動などがあります。手話を通してさまざまな人と出会い、手話について、またコミュニケーションそのものについて深く考えることができました。手話で会話するにあたって必要な《表情》と《伝えようとする気持ち》を大切にして、これからも楽しく活動していきたいと思っています。



学生生活

写真部

私たち写真部は、伍桃祭などの学内行事撮影や写真部オリジナル作品展、県展や市展、様々なイベントの作品展に出展するため、日々カメラを片手に走り回っております。写真は初心者ばかりの集まりで、技術とか難しいことはよくわかりませんが、自由でその人らしいCOLORが表現できればよいと思っています。皆、個性的で感性に満ち溢れており、互いに刺激し合い、補い合い、楽しく笑いながら、この学生生活を写真とともに過ごし、豊かな表現のできる人間性の拡充を目指しております。



学生ボランティアセンター

学生ボランティアセンターでは①ボランティア依頼の受け付け、②ボランティアを希望する学生の募集、を目標とし活動しています。17年12月に設立し、今年一年試行錯誤の繰り返しで活動を行ってきましたが、なかなか活動実績が残せませんでした。そして昨年度は比較的単発的なボランティアを学生に提供していたので、19年度はさらに継続的なボランティアの活動にも力をいれていこうと考えています。より学生に近い立場で、活動を活発的に行っていくという点を次年度の活動目標にあげています。



国際ボランティアサークル「そよかぜ」

国際ボランティアサークル「そよかぜ」は、平成17年度の基礎ゼミⅡ（5期生）のメンバーで発足されました。国際的な交流活動等を通して国際理解を深め、学生による国際貢献活動の推進を目的として活動しています。昨年は新潟国際ボランティアセンター（NVC）に加盟しました。そして、NVC主催の「愛のかけ橋バザー」に参加しました。バザーでは幅広い年齢層の方々や、外国の方、他の大学の学生と共に活動し、様々な交流があり楽しかったです。今後は、さらに活動の範囲を広げていく予定です。



学生Kidsの取り組み

学生Kidsの主な活動は、月例の交流会活動の企画・運営とNPO法人ネットワークKidsの援助・支援です。大学開設時に設立され、今では学生と障害児・者の交流が定例活動以外にも大学内外で日常的に行われるようになっていきました。その学外交流の一つとして、交流会をきっかけに知り合った丸山竜一君と、1月8日に新



潟市の朱鷺メッセで行われた成人式に一緒に参加して来たことを紹介します。

式典会場の朱鷺メッセで待ち合わせをしました。入り口から大勢の人で混雑していましたが、すぐに係員

の方が車椅子の竜一君を見つけてくれました。そして、成人式の会場の席まで道を開け誘導してくれたために、スムーズに行くことができました。また、車椅子専用のスペースが広く設けてあり良かったです。反面、自分と竜一君は地区が同じだったのですが、その地区の席には車椅子専用スペースがなく、地元席に座ることが出来なかったのが残念でした。式典の最中も係員の方がこちらを気にしてくれ、帰る際も込み合っていた中、道を開け誘導してくれて、対応がよかったと思いました。式典後、竜一君は朝も早く寒かったことからお疲れの様子でしたが、竜一君も竜一君のご両親にも喜んでもらえて自分も大変嬉しかったです。

私は今までの人生で肢体不自由の車椅子の人と関わりを持つことがなかったし、自分の性格は暗いと偏見を持っていました。しかし、ネットワークKidsの

方々は皆前向きで明るい人たちがばかりで、接していると自然に関わられたり自分が元気付けられたりしている

ことに気づきました。学生Kidsに入ってよかったと思うことは、自分がただ一緒に純粋に楽しんでいるだけなのに、それが子供たちの社会参加につながっているということです。また、子供達やそのご両親の笑顔を見ることで、自分にも出来ることがあると感じ、大変嬉しく思います。

今後も学生Kidsとして、またそれ以外でも学内外での交流をきっかけに子供たちと仲良くなり、障害児・者の社会参加に協力することが出来たら嬉しいと思います。

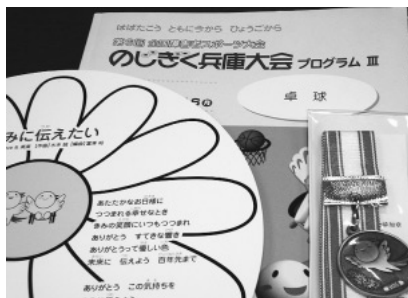


理学療法学科3年
花岡 伸一

学生生活

全国障害者スポーツ大会(兵庫県)に参加して

障害のある人の生きがいの一つとして、全ての人に当てはまるわけではないですが、「障害者スポーツ」の持つ役割と効果は大きく、身体面・精神面に多大な影響を与えると考えます。今日、「障害者スポーツ」という言葉をよく耳にしますが、そもそも「障害者スポーツ」という特殊なスポーツがあるわけではありません。障害のために出来ないことがあるだけだという考え方の基に、“何が

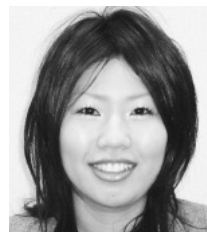


出来ないか”ではなく、“何ができるか”に焦点をあて、用具やルールを工夫しながら行われているものを「障害者スポーツ」と呼んでいます。障害に合わせて、プレーするのに不便なところを工夫することで、障害のある人も、そしてない人も一緒に同じようにスポーツを楽しむことが出来るようになるのです。このようなところに障害者スポーツの魅力を感じます。

私は、平成18年10月14～16日に兵庫県で行われた『第6回全国障害者スポーツ大会』に介助員として参加することができました。この大会を通じて、選手と大会期間中の生活を共にする中で、一人ひとりの試合に対する熱い思い、試合中の真剣な眼差し、ライバルとの深い絆、勝利へのこだわりなど、真のスポーツマンシップを見ることができたと思います。

共に笑い、共に喜び、共に悔しがり、互いを支え合うことで人とのつながりは生まれてきます。今回の大会に介助員として参加したことで人との関わり合いには、様々な喜怒哀楽に対応できる柔軟性が大切であると感じました。

2009年には本県において全国障害者スポーツ大会が行われます。この大会が成功を収めるためには更なる障害者スポーツの普及と理解、大会運営における各種ボランティアの養成、そして、各選手が持っている力を最大限に発揮できるように、障害者スポーツを根付かせ、その魅力を伝えていく活動が大切だと思います。



社会福祉学科3期生
(2007年3月卒業)
五十嵐 愛

アビリンピックにいがた2006にボランティアとして参加

9月24日、第3回新潟県障害者技能競技大会—アビリンピック2006が新潟テクノスクー



ルにて開催されました。そこに本学社会福祉学科2年生と3年生の男女14名の学生と星野恵美子助教がボランティアとして参加しました。

アビリンピックは、障害者の職業能力の開発を促進し、その雇用の促進と地位の向上を図ることを目的に行われます（新潟県雇用開発協会主催）。

また、ボランティアとして参加した本学学生達も競技参加者の案内や誘導をはじめ、競技種目である喫茶サービスの際のお客様役や表

彰式のアシスト、会場係などを行いました。

参加した学生からは「障害を持つことの大変さや具体的にどういう場面で不便を感じるかを話し合うことができた」、「縫製競技やパソコン競技への真剣で熱心な参加態度に胸を打たれた」といった感想が聞かれました。真剣に取り組む参加者との交流を通して、授業では得がたい貴重な体験で目が開かれた1日でした。

ロシア・ハバロフスク国立極東総合医科大学との学術交流締結式が行われました

9月29日本学キャンパスにて、ロシア・ハバロフスク国立極東総合医科大学との学術交流締結式が行われました。

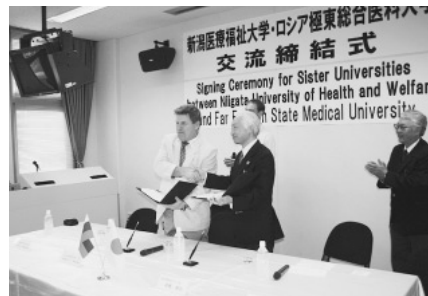
極東総合医科大学は約3000人近くの学生らが学ぶ、まさに極東の医学の中核を担う大学のひとつです。

交流締結式では、本学高橋学長と国立極東総合医科大学ウラジミール・モロチニー学長が協定書を交換し、固い握手を交わし、ウラジ

ミール・モロチニー学長による「日露両大学間の交流の将来」と題した記念公演が行われ、本学教員をはじめ、多くの看護学科の学生が熱心に耳を傾けていました。

今回の記念すべき学術交流締結により、今後は、日本とロシアの看護教育の比較等を通じ、教員が研究交流を深め、また学生の短期研修も積極的に行う方針です。

(国際交流委員会)



日韓共同プロジェクト「空飛ぶ車いす」。スリランカでのボランティア活動に参加

昨年12月23日～28日の6日間、日韓共同プロジェクト「空飛ぶ車いす」活動の一環として、スリランカでのボランティア活動に本学から義肢装具自立支援学科の大鍋教授、看護



学科の杉本助手、理学療法学科2年生の渋谷早央さんの計3名が参加しました。

「空飛ぶ車いす」とは、99年に工業高校生が中心となって開始されたもので、中古の車いすを修理・整備し、車いすを必要としているアジア諸国へ贈る国際ボランティア活動です。インド洋津波被災地であるスリランカに対して、これまでに350台の車いすを届ける国際支援をしており、本学からも参加した今回は100台の車いすを届けました。

今回のスリランカ訪問では、車いすを修理した高校生や大学生が参加し、その車いすの

フォローとアジア諸国の車いす不足や車いすの利用状況、今後の活動などについて現地関係者と意見交換を行いました。

本学での活動を先導する大鍋教授は、今後の抱負として「より多くの学生に興味を持ってもらい、本学独自の活動を創造し、高校・大学との連携を図りたい。さらに車いすを送っているスリランカやタイなどに加え、広くアジア諸国・世界との連携を拡大していきたい。今後は本学の全学科から学生の参加を期待し、本学の総合力を発揮できるようにしていきたい」と語りました。

新しい食堂がOPENします！

4月から新生生の入学とともに新しい食堂が新設の第3厚生棟にオープンします。第3厚生棟は、1階に約250席の食堂、2階に約400席の飲食ができる学生サロン、3階に講義室を備えた建物で、1・2階を合わせた飲食スペースは本学最大のものとなります。また、2階の学生サロンにはLAN装置が設備され、ノートパソコンを接続しての学習や交流が可能です。

この食堂の最大の特徴はキャッシュレスで食事ができることです。今回導入するICカード機能付学生証に、事前にチャージ（入金）することにより食堂での精算をスムーズにし、混雑緩和を実現します。

また、ご飯やおかずを自分で組み合わせることが出来ますので、ご飯は自宅から持ってきておかずを購入するなど、より自由度の高いメニューの組み合わせが可能になります。



学友会

平成18年度 学友会活動を振り返って



学友会会長
長嶋 健介

みなさんこんにちは。平成17、18年度学友会会長の言語聴覚学科4年長嶋健介です。昨年度の学友会は新入生オリエンテーションでの学友会への勧誘を初めとし、球技大会の企画・実行・運営、大学祭の出店、また自治会など地域との交流に参加してきました。従来のシステムであれば新2年生が学友会会長になるのですが、学友会をより経

験した新3年生が学友会会長になり指揮をとった方がより円滑に学友会を組織立てられると考え、学友会会則を昨年度より変更しました。

その結果、2年生と3年生との情報交換を容易に、そして的確に行うことができ、前年度よりも組織としての結束力が強くなりました。行事についても、全員で協力し、企画・実行・運営を行っており、前年度よりもパワーアップした学友会であったと思います。ご協力ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

同窓会

同窓会活動のご紹介

早いもので、新潟医療福祉大学同窓会が設立し三年目に突入しようとしております。初年度から行ってまいりました基盤作りをさらに確立させていこうと日々励んでいる次第です。

これまで本会が行ってまいりました活動について簡単にご紹介いたします。同窓会総会の開催、ニューズレター・伍桃（同窓会誌）の定期発行、国家試験の激励と合格祈願鉛筆の配布、卒業時における優秀学生や優秀クラブへの副賞贈呈などです。また、発展途上の組織のため、流動的に会則の変更も行っております。

本会は、在学時・卒業後に関わらず、会員相互の関係を深め、サポートし合うことを目的に運営しております。しかし、設立して間もない本会は未だ多くの活動を企画・運営することができずにいま

す。そのため会員へのメリットが十分でないとも言えるでしょう。しかし、18年度と同窓会総会で、在生も準会員として同窓会に参加が出来るよう会則が変更となりました。これを契機に大学の内側と外側とが連携をして、本会又は本学を盛り上げていけるのではないかと考えております。

母数との関係もあり、まだまだこれからの組織ではありますが、確実に年を重ねるごとに厚みを増す組織です。私ども同窓会役員と一緒に本会を盛り上げて行きましょう。

同窓会会長 齊藤公二



国家試験合格祈願鉛筆

受験生のみなさんへ

イベント案内

■オープンキャンパス

- 第1回／7月16日(祝)
- 第2回／8月4日(土)
- 第3回／9月8日(土)

新潟医療福祉大学を体感できる、一大イベントです！ 大学概要説明や入試概要説明に加え、学科ごとに体験実習や模擬授業、教員や在学生に直接相談できる個別相談コーナーなど、多彩なプログラムを予定しています。

■キャンパスツアー

- 第1回／4月28日(土)
- 第2回／6月23日(土)
- 第3回／10月6日(土)
- 第4回／11月3日(祝)
- 第5回／12月8日(土)

大学概要説明、入試概要説明はもちろん、施設見学、個別相談コーナー等充実のプログラムを用意しています。また、学外から講師を招いて看護・医療・福祉・健康系総合ガイダンスや小論文対策講座など各回毎に違った趣向を凝らしたプログラムを計画していきます。

メールマガジン案内

Eメールアドレスが無くても大丈夫!!

新潟医療福祉大学では月に1度、本学の様々な情報をメールマガジン「QOLサポーター新潟(NUHW)」としてみなさんにお届けしています！ オープンキャンパスやキャンパスツアーなどのイベント情報、新設学科情報、入試情報といった最新情報や教員・学生からのメッセージ、先輩の合格体験談など進路決定や入試対策の参考になる特集をはじめ、様々な内容を予定しています。Eメールアドレスをお持ちでなくても、インターネットに接続できるパソコンがあれば、どなたでもご覧いただけます。ぜひ、本学ホームページからご登録ください。

ホームページ案内

<http://www.nuhw.ac.jp/>
(4月下旬リニューアル予定)

<http://www.nuhw.jp/m/>
(携帯電話からはコチラ)

新潟医療福祉大学の情報が満載です。新着情報やイベント情報などを随時更新していきます。ぜひご覧ください。資料請求、イベント参加申込み、メールマガジン登録等もこちらからどうぞ！



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地 TEL025-257-4455(代) FAX025-257-4456

URL <http://www.nuhw.ac.jp/> 携帯サイト <http://www.nuhw.jp/m/>

【入試事務局】TEL025-257-4459 E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp